

Decade/Grand Order

KBS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界の破壊者、デイケイド——

七つの特異点を巡り、その瞳は何を見る。

※深刻な原作破壊が多々あります。世界の破壊者なので大体わかってください。おのれデイケイドオオオ!!お前のせいで型月の世界も破壊されてしまった!

目次

サーヴァント大戦	1
カルデアの世界	5
炎上	14
第一遭遇者・カルデアの所長	20
破壊者の資格	33
バトル援軍・新サーヴァント	38
超トレーニングの乱入者	44
ライバル怪盗いらっしやいませ	49
ノーブルファンタズム	59
ツンツン不器用の破壊者	68
2つの弾、1つの矢	75
召喚 ホッパー・ブラザーズ	79

聖剣 闇のセイバー	90
剣・英霊セイバーズ	97
後輩マッシュ、参上!	102

サーヴァント大戦

私は夢を見た。

地面は重力を忘れて浮き上がり、空は絵の具を幾つも混ぜ合わせたようにぐちゃぐちゃに歪み、まるで世界が終わったかのような光景の中に存在する、例えるなら神殿のような何か。

そして、そこに佇む白いバツクルのベルトを巻いた、一人の男性。

顔は見えないが、何故かその人を私は知っている気がした。

彼はベルトの脇に下がるホルダーからカードのような物を取り出し、空に向けて何か言っているが、距離が遠いので聞こえない。

…ただ、なんとなくだが。唇の動きからして、最後に彼はこう言ったように思えたのだ。

『変身』と――

ある町に一つの写真館があった。しかし、そこに住むカメラマンの撮る写真は歪んだ写真ばかりで、いつも店に文句が殺到しては彼は店長の孫娘に怒られる。

そして今日も彼、『門矢 士』は『光 夏海』に説教を喰らっていた。

「いいですか土くん、写真を撮るのは勝手ですけど、土くんのピンボケ写真でお金をせびっちゃダメなんですよ！毎回苦情を聞くのは誰だと思ってるんですか!?!」

「客は俺に撮られたがってるが、世界が俺に撮られたがってないんだ、仕方ないだろ」
そう言ってマゼンタカラーの二眼レフのカメラを弄りながら土は備え付けのソファに座りながら足を組みふんぞり返るが、それがまた夏海の癩に触った。

「もう！反省しないんなら……秘伝！笑いのツボ!!」

瞬間、土の首筋にある笑いのツボに夏海の親指が素早く叩き込まれ、土は強制的に吹き出した。

「あはははは、夏ミカン、はは、お前っ、ははははははー！」

「しばらく笑って反省してください!ふん!

強制的に笑わされ腹筋を痛ませる士を放つて夏海がそのまま部屋を去ろうとしたその時、彼女は盛大にキツチンから飛び出した『平行世界リ・イマジネーションの仮面ライダークウガ』こと『小野寺ユウスケ』に正面衝突した。

「きゃあつ!」

「うおおああつ!」

夏海は尻餅をつくが、ユウスケは後ろに居た光写真館の店長であり夏海の祖父『光栄次郎』に当たり、まるでドミノ倒しのように二人で共に後ろに倒れた。

「いててて…店長、夏海ちゃん、大丈夫ぶつ」

倒れたまま二人に声をかけるユウスケの顔の上を、栄次郎の腕から離れた一羽の鶏が足場代わりに進んでいく。

「おとつと、いけな…おわあああつ!」

立ち上がった栄次郎は、士が現在笑い転げている部屋まで鶏を追いかけるが、捕まえようとした際に足元の紐に引っ掛かり、転びながら鶏をキャッチすると共に、背景ロールの幕が落ち、光を放った。

「これは……」

「新しい世界、ですか……?」

「しっかし、なんだこの絵?北極か?」

「南極じゃないかな?」

笑いが収まった士、起き上がった夏海とユウスケ、そして捕まえた鶏を抱く栄次郎の一同の視線が集中する。

この写真真館には士達しか知らない『ある秘密』が存在する。それは、この背景ロールに映し出された絵の世界へと、この写真館は転移するのだ。

この謎の力でかつて士達は幾つもの『仮面ライダー』の世界を巡って戦い続けてきたのだ。

そして、今回映し出された絵には『雪山の中に小さく位置する円形の施設』が映し出されていた。

「どんなライダーの世界かはまだわからないが、行くとするか」

そして士達は、絵から発生する光に包まれ、世界の垣根を越えた。

カルデアの世界

「……なさい！起きなさい！ちょっと、聞いてるの!？」

「ああ……?？」

聞いたことの無い怒声を耳にした士は目を開く。

士の傍らに立っている声の主らしき銀髪の女性は、眉間にシワを寄せ口をへの字に曲げながら士を見下ろしていた。

「誰だあんた——」

「もう邪魔よ、失せなさい!」

疑問を口にしようとするが、胸ぐらを掴まれ椅子から立たされると、女性とは思えないほどの力で引つ張られ、部屋の扉の外に士は放り出されてしまった。

「……なんだ一体」

「……追い出されちゃいましたね」

左から聞こえた声に士は顔を向ける。そこにはピンクブロンドの髪と眼鏡が特徴的な十代後半程度の年齢であろう少女が士を見ていた。

「……お前誰だ?？」

「えっ。さっきお会いしましたよね……？」

「あー……悪いな、少し忘れっぽいな」

自分は会った覚えは無いが、相手が『自分が来る前のこの世界での自分』に面識がある事に気付いた土は、適当に話を合わせる。

「そうでしたか。では改めて自己紹介をさせて頂きます。私は『マシユ・キリエイト』、この『人理継続保障機関カルデア』の局長です」

「マシユか、よろしく……とりあえずだが、俺はどうしてこのカルデアに居るのか教えてくれるか？」

説明を終え、ペコリと頭を下げ礼儀正しく挨拶するマシユという少女。土は軽く挨拶を交わし、この世界の情報を得る為に次の疑問を口にした。

「了解です。まず先輩は、このカルデアに集められた四十八人のマスター候補の最後の一人……一般枠として連れてこられました。

そして先程から『オルガマリー・アニメスフィア』所長のミツシヨンについての講義が始まっているのですが……先輩は居眠りしかけてレムレムしていたせいで所長の怒りを買ってしまい、追い出されてしまったようです。これではAチームからは外されてしまいますね」

短く、それでいて詳しく事情を伝えたマシユの説明を聞き、土は心の内で呟く。

(さしずめここは、カルデアの世界……って所か)

「……大体わかった。正直、小難しい講義なんか聞くのも面倒だからな。どこか適当な所で休むとするか」

「でしたら、先輩の個室へご案内します。そこならゆっくり休めますよ」

「そうか、なら案内してくれ」

士はマシユに案内され、先程の部屋から少し離れた部屋の扉の前へとやってきた。

「こちらの部屋です。先輩の出番はまだ時間がありますから、ごゆっくりどうぞ」

「ああ……というか、その『先輩』ってのはなんだ？」

「あ、すみません。なんというか、私からしたらここに居る人はみんな先輩のようなものなのです……」

「そういうことか、大体わかった」

「大体わかっていただけましたか。それでは、私はこれで」

マシユは士に一礼すると、スタスタと足早に去っていき、先程の部屋へ戻っていった。

世界を移動した時、士には警察官やバイオリニスト等、その世界に適した役職や立場が与えられる。

(この世界の俺の『役割』はどうやら、あの後輩と他のマスターとやらと一緒に人理と

やらを守れば良いらしいな)

そう考えていたその時、土はふと視界の端に小さな動体を見つけた。傍らの観葉植物の鉢に隠れた『それ』を素早く目で追うと、そこにはフワフワとした白い毛と小柄な体躯が特徴的なリスのような生き物がおり、土を見つめていた。

「……なんだコイツ」

変な生き物が居た、と捕まえてマシユにでもつき出そうかと思つた土は手を伸ばす。

「フオウツ!!」

「ぐっ!？」

しかしその生き物は怒っているような鳴き声と共に、勢いよく土の手へと噛みついた。

そして、土の手を噛み千切らんと牙を立てる生き物を、土は苦痛に顔を歪めつつ引き剥がす。生き物は土に引き剥がされると脱兎の如くさっさと廊下に逃げていった。

「痛て……なんだあの変なのは……」

痛む手を押さえつつ土が個室に入ろうとしたその時だった。

ドオオオオンツツ!!!

「なっ……!?!」

カルデア全体に響くような轟音と共に、廊下の向こうから小さな火の粉が士の頬を掠めた。そして、緊急事態を知らせるアナウンスがカルデアに鳴り響く。

「い、一体なんだあっ?!」

すると何故か士の個室から白衣の男が飛び出し、士には目もくれず慌てた様子で火の手の上がる方へ走り出していった。

「……確か、さっきのマッシュとかいうのがあつちの部屋に向かったな……俺も行くとするか」

カルデアの説明や部屋まで案内された恩も一応ある、ということで士も白衣の男を追うように走っていった。

士が辿り着くと、火の元である管制室は案の定火の海と化していた。先程の轟音から察するに爆発でも起きたのか、天井や壁も一部崩落し、士が探していたマッシュもまた、巨

大な瓦礫の下敷きにされていた。

「マシユー！」

「あ………せん、ばい………？」

士の声で意識を少し取り戻したのか、マシユは血を垂らしながら頭を上げ、生気が消えかけている瞳で士を見上げた。

「マシユ、今どけてやる」

「………でも、私はもう………」

「……………」

士の瓦礫をどけようとする手が止まる。本人の言う通り、下半身が瓦礫に潰されるといふ致命傷を負ってしまった以上、マシユの生存は絶望的なのは士もわかっていった。

『システム レイシフト 最終段階に移行します。』

西暦 2004年 1月30日 日本 冬木

ラプラスによる転移保護 成立。

特異点への因子追加枠 確保。

アンサモンプログラム セット。

マスターは最終調整へ入ってください。』

「先輩……早く、逃げないと……」

「逃げるさ。ただしお前を助けてからな」

士には意味が理解出来ないアナウンスが喧しく鳴り響く中、士はバックル状態の『ディケイドライバー』を取り出し、腰に当てるとバックルからベルト部分が飛び出し士の腰に巻きつく。

「あ……その、ベルト……」

「少し待ってろ」

士が左腰に出現した『ライドブッカー』を開き、『仮面ライダーディケイド』のカードを取り出そうとしたその瞬間。

『コフィン内マスターのバイタル

基準値に 達していません。

レイシフト 定員に 達していません。

該当マスターを検索中……発見しました。

適応番号48 門矢 士 を

マスターとして 再設定 します。

アンサモンプログラム スタート。

霊子変換を開始 します。』

『レイシフト開始まで あと3』

「……………あの……………せん、ばい」

マシユは痛みを堪え、土の手を握り、声を絞り出す。

『2』

「その、ベルトは……………」

夢で見た、世界の終わりのような光景の中に佇む人物が巻いたそのベルトの正体を聞く為に。

『1』

「へんし——」

『全工程 完了。』

ファーストオーダー 実証を 開始 します。』

互いに言いかけたその時、マシユと土を光が包んだ。

——しかし、この時誰も気づけなかった現象が一つあった。

光に包まれる直前、ライドブツカーから一つの光が飛び出し、マシユの身体へと入っていった事を。

炎上

——声が聞こえた。

「マシユ……目を覚ますんだ、マシユ……」

……だれ、ですか？

「僕の事はどうでもいい……ただ、君に聞きたい。君は、この世界を守りたいかい？」
……守りたい、です。まだ私は、やるべき事が残っている気がします。

「……なら、力を貸そう。僕の力を君に全て託す。ただし、そうすれば君の時間はさらに縮まる事になる。それでもいいかい？」

……お願いします。

「わかった……そうだ、もう一つ、君に伝える事があった」

……何でしょうか？

「……君が幼い頃に僕は君の中にやってきた。しかし今、『もう一人』入ってきたよう
だ」

もう一人……？それは、どういう——

「すまない、時間だ。そろそろ君の肉体も意識を取り戻すだろう。健闘を祈るよ、どう

か僕の力を役立ててくれ」

「……………おい！おい、起きろマシユ！」

「……………う……」

士の声がマシユの意識を現実へ引き戻す。ぬかるんだ地面から体を起こし泥を払い落とすと、マシユは周囲を見回し、状況を確認する。

現在マシユと士の周りには、瓦礫が火の粉を散らしながら燃え続けていた。

「……」

「なんでも、レイシフトとかいうのをしちまったようだ。さつき通信してきた奴が言っただけだが」

「……………通信は回復したのですか？」

「少しだけな。端的に状況を伝えられて切れちまったよ。なんでもここは、2004年の日本らしい」

「2004年の、日本ですか……………？しかし、こんな記録は日本には……………」

マシユが知る限り、日本はこのような火の海ではなかった。自分の認識が間違っていたのかと少し不安になったが、落ち着いた声で士は説明する。

「らしいな。確かさっきの奴は、ここを特異点だとか呼んでいた……っというかお前、その格好はなんだ？」

「え？」

士に服装を指摘され、マシユは自分の体を見回す。そして、近くに落ちていた割れた鏡を見る限り、そこには明らかにいつもとは違う自分が映っていた。

ピンクブロンドの髪は黒く、紫の瞳も真っ赤に色を変化させ。

服も白衣から少々露出の多いボディラインが出やすく、黒をベースに黄色と赤のラインが入った物となり。

さらに左胸には奇妙なマークと腰にも白のベルトが巻かれていた。

「これが……私？」

マシユは自分の身体をペタペタと触る。身体のサイズが変わったわけではないが、何か力が漲っている感覚が有った。

「俺が意識を取り戻した時には、もうお前その姿になってたぞ」

「まさか……これが彼が授けてくれた力……？」

「……彼？」

声だけが聞こえ姿の見えなかった英霊が、マシユの脳内に浮かび上がる。彼が残りの力を自分に託すと言い残し、消滅したのは確かに覚えていた。

「……恐らく、私にこの力をくれた英霊です。しかし、真名どころかクラスも告げずに消滅してしまいました」

「そうか……だが、その力は多分ソイツとは違う力だろうな」
ほぼ確信に変わっていたマシユの予測を、士は違うと言いつ切る。

「……違う力、とは？」

「俺は今のお前の姿に似た姿になる奴を知ってる。恐らく、お前の中にソイツの力が入っちゃったのかもな」

「そうなんですか……では、あの時の彼の力は一体……」

「……もしかしたら、2つの力が1つに混じってそうなるのかもな」

マシユの力の原因を探っている中、カルデアからの通信を知らせる電子音が響き、小さな画面が士とマシユの前に現れ、カルデア医療スタッフ『ロマニ・アーキマン』が画面の向こうに姿を現す。

『門矢くん、マシユは目覚めたみたいだね』

「ああ」

『マシユ、今自分がどのような状態なのかは理解できているかい？』

「はい……今の私は『デミ・サーヴァント』として存在しているのですね」

『その通り。人間に英霊を融合させ、サーヴァントの力を扱えるようにする……君は

「どうやら、デミ・サーヴァントとなることで奇跡的に助かったらしい」

「はい。なんとなく理解は出来ています」

『それなら話は早い。門矢くん、僕らカルデアの使命は歴史を歪める特異点の修正だ。早速マシユと共にその特異点の修正にあたってくれるかい？』

「大体わかった。だが、どうすればこの特異点とやらは修正される？この大火事を消火しろってか？」

茶化すように言い、土は今も傍らで燃え上がる炎と瓦礫を一瞥し、画面に視線を戻す。

『残念だけど違うね。今君たちが居る町には、本来の歴史では観測されない異常な魔力反応が発見されているから、それを断てばいい。だがまずはこの通信を安定させたいから、向かってほしい場所があるんだけど、構わないね？』

「ああ。何処だ？」

『その特異点の何処かに霊脈のターミナルが有るはずだ。だからそこまで——』

しかし、言いかけたところでカルデア側の設備の限界が来たのか、ロマニからの通信は途切れた。

「霊脈がどうこう言っていたな……とにかく行くとするか」

「そうですね、善は急げです」

靈脈地を探す為、特異点を修正する任務を任された士と、英霊から力を託されたマシユは、歩き始める。

炎上し汚染された都市、冬木での戦いが間もなく幕を開ける。

第一遭遇者・カルデアの所長

「先輩先輩、見てくださいこれ」

「なんだ？」

カルデアとの通信を安定させる為、霊脈地を探すマシユと士。その途中でマシユは歩みを止め、士を呼び止める。士が振り向くと、そこには身長とほぼ同じサイズの盾を持ったマシユが居た。

「……何処にあったそんなの」

「何か武器になるものが無いかと探して歩いていたら、このベルトから出た光の粒子がこの盾のようになりまして……」

「……どうやら、早速その盾の使い所らしいな」

士に言われて気がついたのか、剣や槍や弓を持った骸骨兵四体が前後に二体ずつの体勢で二人を取り囲んでいた。

「……意思の疎通は不可能。敵と判断します！」

「……変身はしなくても充分だな。行くぞ」

マシユは盾を、士はライドブツカーをガンモードへ変形させ、構える。

《GI、GAAAAA!!》

一体の骸骨兵が吼え、それが開戦の合図というように一斉に骸骨兵は襲いかかる。

「やああっ!」

《GAAA!》

マシユは盾と共に槍を持つ骸骨兵へ突撃し、横から襲ってくるもう剣を持つ骸骨兵を蹴飛ばし怯ませると、素早く盾を横薙ぎして叩き壊す。

《GIIIIAAA!!》

「フン……」

何処に声帯が在るのかは不明だが、奇声を発しながら弓を構える骸骨兵は土に向けて矢を放つ。

士はライドブッカーから発射されるエネルギー弾で的確に矢を撃ち落とし、さらに骸骨兵の肩の関節を撃ち抜くと、トドメに頭を撃ち抜く。

《GAAAAA!》

「お前で最後か」

二体目の剣を持つ骸骨兵は本能のままに土に剣を振るうが、後退しながら土は回避し、ライドブッカーをソードモードへと変形させ、まず剣を持つ手を斬り落とす。それでも動きを止めはしない骸骨兵を、士は二つに斬り裂いた。

「……戦闘終了。なんとか、なりましたね」

「ああ……しかし、なんだコイツらは？」

「恐らく、魔術で動かす人形と思われます。これから先も多分襲ってくるでしょうから、細心の注意を払って進むべきです」

「ああ。しかしお前、結構強いんだな」

「いえ、そんな事ありません。戦闘訓練では私はいつも最下位でしたし……多分、私に宿っていた英霊の力だと思います」

「そうか……」

武器を利用しつつも、基本は己の肉体で戦う姿に、士はマシユの中に入った『もう一人』の人物を突き止めつつあった。

一息ついてから再び士とマシユは霊脈地を探す為歩き始める。前からの奇襲に備えられるようにマシユが前を歩き士を先導する形で進んでいると、マシユは唐突に立ち止まる。

「……どうした？」

「……何か、聞こえませんか？人の声のような……」

「声だと……?」

マシユと士は目を閉じ、耳を澄ませた。

よく聞くと、炎が燃え盛る音に混じり、女性の声のようなものが近くから聞こえてくる。

「この声は……どこかで聞いたことがあるような気がするな」

「……所長の声、のような気がします。とにかく、行つてみましょう!」

マシユと士は感覚で声のする方向へ走る。

すると本当に、オルガマリーが三体の骸骨兵から逃げ回る姿がマシユと士の目に映つた。

「何なの、何なのよコイツら!?! なんだって私ばかりこんな目にあわなくちやいけなの!?! もうイヤ、助けてよレフ! いったって貴方だけが助けてくれたじゃない!」

今にも泣きそうな顔でオルガマリーは骸骨兵達から逃げ、この場に居ない『レフ・ライノール』へと助けを求める声を上げていた。

「オルガマリー所長!」

「あ、貴方達!?! ああもう、一体何がどうなってるのよおおっ!」

「いいから下がつてろ。マシユ、ソイツを頼むぞ」

「了解です!」

オルガマリーをマシユに任せ、士は再びライドブッカーをガンモードにすると、トリガーを押し続けて連射する。『クラインの壺』から無限に供給されるエネルギー弾は尽きることも無く、骸骨兵達の体を蜂の巣にする。

「……こんなもんか。おいあんだ、無事か？」

塵に還る骸骨兵達から踵を返し、士は後ろを向く。オルガマリーは士とマシユの顔を交互に見ながら、呟くように言った。

「……。……どういう事？」

「所長……？ああ、私の状況ですね。信じがたい事かもしれませんが、今は——」

「サーヴァントとの融合、デミ・サーヴァントでしょ。そんなの見ればわかるわよ。問題なのは、それがどうして今になって成功したのかって話よ！」

いえ、それ以上に貴方！私の演説に遅刻した一般人！」

「なんだ？」

「「なんだ」じゃないわよ！なんでマスターになってるの!?サーヴァントと契約できるのは一流の魔術師だけ！アンタなんかマスターになれるはずないじゃない！その子にどんな乱暴を働いて言いなりにしたの!？」

癩癩を起こすオルガマリーに対して、士はやれやれといった感じにため息を吐く。

「誤解にも程があるな。マシユ、面倒だから状況の説明を頼む」

「了解です。所長、落ち着いて話を聞いてください。その方がお互いの状況管理もしやすいですから」

「……わかったわよ」

「……以上です。私達はレイシフトに巻き込まれ、この冬木に転移してきました。他に転移したマスター適性者はいません。所長がこちらで合流できた唯一の人間です。でも希望が出来ました。所長がいらつしやるなら、他に転移したマスター適性者も……」

「……居ないわよ。それはここまでで確認しているわ……認めたくないけど、どうして私と貴方とソイツがレイシフト出来たのかわかったわ」

自分達以外にも仲間が居るのではないかという僅かな希望をオルガマリーは遮り、頭に浮かび上がった結論を口にする。

「生き残った理由に説明がつくのですか？」

「消去法……いえ、共通項ね。私も貴方もソイツも、『コフィンに入っていないかった』。生身のままのレイシフトは成功率が激減するけどゼロにはならない。一方、コフィンに

はブレーカーがあるの。成功率が95%を下回ると電源が落ちるのよ。だから、彼等はレイシフトそのものを行っていない。ここにいるのは私達だけよ」

「なるほど……流石です所長」

「落ち着けば賢い奴なんだな」

「それどういう意味!? 普段は落ち着いてないって言いたいワケ?!

士としては褒めたつもりなのだが、それがオルガマリーの勘に障るのか、再びオルガマリーは士を怒鳴る。しかし、ここは落ち着かなければいけないと判断したのか、咳払いをしてから士に向き直り、口を開く。

「……まあいいでしょう。状況は理解しました。門矢 士。緊急事態ということであなたとキリエライトの契約を認めます。ここからは私の指示に従ってもらいます。……まずはベースキャンプの作成ね。いい? こういう時は霊脈のターミナル、魔力が収束する場所を探すのよ。そこならカルデアとも連絡が取れるから。それで、この街の場合は……」

「このポイントです、所長。レイポイントは所長の足元にあると報告します」
マシユに指摘され、少し冷や汗を垂らしつつ余裕の表情を見せる。

「うえっ!? あ…そ、そうね、そうみたい。わかつてる、わかつてたわよ、そんな事は!」
「絶対わかつてなかっただろ」

捲し立てるようにわかっていたと口にするオルガマリーに、士は容赦なく指摘する。

「わかってたわよ!!……マシユ。貴方の盾を地面に置きなさい。宝具を触媒に召喚サークルを設置するから」

「……だ、そうです。構いませんか、先輩？」

「別に良いと思うぞ」

「……了解しました。それでは、始めます」

マシユが地面に盾を置くと、盾を中心に光が周囲を包み、青く輝く小部屋のような空間が形成された。

「これは……カルデアにあった召喚実験場と同じ……？」

マシユが空間を見渡していると、ロマニからの通信が入り、画面が映る。

『シーキュウ、シーキュウ。もしもーしーよし、通信が戻ったぞー！二人ともご苦勞様、空間固定に成功した。これで通信も安定するし、補給物資だって——』

ロマニが喜びの表情を見せる中、マシユと士を押し退けてオルガマリーは画面の向こうに怒鳴る。

「なんで貴方が仕切ってるのロマニ！レフはどこ!?レフを出しなさい！」

『うひゃああああ!!しょ、所長、生きてらっしゃったんですか!?あの爆発の中で!?しかも無傷!?!どんだけ!?!』

「どういう意味ですかっ！いいからレフはどこ!? どうして医療セクションのトップがそこに居るの!？」

『……なぜ、と言われても僕も困る。自分でもこんな役目は向いてないと自覚してる。でも他に人材が居ないんですよ、オルガマリー』

ロマニは死亡したと思われるいたオルガマリーの生存に驚きながらも、冷静に現状を伝える。

『現在、生き残ったカルデアの正規スタッフは僕を入れて二十人にも満たない。僕が作戦指揮を任されているのは、僕より上の階級の生存者が居ないためです。レフ教授は、あの管制室でレイシフトの指揮を取っていた。あの爆発の中心に居た以上、生存は絶望的だ』

「そんな……レフ、が……? いえ、それより、待つて、待ちなさい、待つてよね」

レフ・ライノールという信頼に足る人物を失ったショックから、膝から崩れ落ちかけたオルガマリーは踏みとどまり、目を見開きながらロマニに問う。

「生き残ったのが二十人にも満たない? じゃあマスター適性者は? コフィンはどうなったの!？」

『……47人、全員が危篤状態です。医療器具も足りません。何人か助けることは出来ても、全員は——』

「ふざけないで、すぐに凍結保存に移行しなさい！蘇生方法は後回し、生き残らせるのが最優先よ！」

『ああそうか、コフィンにはその機能がありました！至急手配します！』

通信画面からロマニの姿が消え、バタバタと物音が聞こえてくる中、マシユは驚きながら呟いた。

「……驚きました。本人の承諾無く凍結保存を行うのは犯罪行為です。なのに即座に英断するのは。所長として責任を負うことより、人命を優先したのですね」

「バカ言わないで！死んでさえいなければ後でいくらでも弁明できるからに決まってるじゃない！」

マシユに八つ当たりするように怒鳴り散らすと、オルガマリーはうつむき、頭を掻きむしりながら呟く。

「大体、47人分の命なんて私に背負えるワケないじゃない……！死なないでよ、頼むから……ああもう、こんな時レフが居てくれたら……！」

数分後、再び画面にロマニが映り、状況を報告した。

カルデアはその機能の八割を失っており、ロマニの判断で残った人材をレイシフトの修理、カルデアスとシバの現状維持に割いており、外部との通信が回復次第補給を要請

し、カルデア全体を立て直すという。

『……報告は以上です』

「結構よ。私がそちらに居ても同じ方針をとつたでしょう……はあ。ロマニ・アーキマン。納得いかないけど、私が戻るまでカルデアを任せます。レイシフトの修理を最優先で行いなさい。私達はこちらでこの街……『特異点F』の調査を続けます」

『うえっ!? 所長、そんな爆心地みたいな現場、怖くないんですか!? チキンのクセに!?』

「……ほんつとう、一言多いわね貴方は。今すぐ戻りたいのは山々だけど、レイシフトの修理が終わるまでは時間がかかるでしょう。この街に居るのは低級な怪物だけだとわかったし、デミ・サーヴァント化したマッシュと、なんか変な武器を持つてる門矢士がいれば安全よ。事故というトラブルはどうあれ、与えられた状況で最善を尽くすのがアニムスフィアの誇りです。」

これより、門矢 士、マッシュ・キリエライト両名を探索員として、特異点Fの調査を始めます。とはいえ、現場のスタツフが未熟なので、ミツシヨンはこの異常事態の原因、その発見に留めます。解析・排除はカルデア復興後、第二陣を送り込んでからの話になります。貴方もそれで良いわね?」

「大体わかった。構わないぞ」

士は正直長いのでほとんど聞き流していたのだが頷いた。

『了解です。健闘を祈ります、所長。あと、これからは短時間ですが通信も可能ですよ。緊急事態になったら遠慮なく連絡を』

「……ふん。SOSを送ったところで、誰も助けられないクセに」

『……所長?』

オルガマリーは小さく愚痴のように呟くが、すぐに目線を戻した。

「なんでもありません。通信を切ります。そちらはそちらの仕事をごなしなさい」

そう言つて通信を切るオルガマリーに、マシユは少し不安そうな表情で提案する。

「……よろしいのですか?ここで救助を待つ、という手もありますか……」

「そういうワケにはいかないのよ……カルデアに戻った後、次のチーム選抜にどれだけの時間がかかるか。人材集めも資金繰りも、一ヶ月じゃきかないわ。その間に協会からどれほど抗議があると思つているの?最悪、今回の不始末の責任としてカルデアは連中に取り上げられるでしょう。そんなことになったら破滅よ。手ぶらでは帰れない。私には連中を黙らせる成果がどうしても必要なの。」

……悪いけど付き合ってもらうわよ、門矢 士、マシユ。とにかくこの街を探索しましょう。この狂つた歴史の原因がどこかにあるはずなんだから」

オルガマリーが一通りの方針を決めたその時。

「才話ハ終ワツタカナ？」

「……!? な、何!？」

そこに立っていたのは、人の形をした影。恐らく二人組と思わしき影は、気配も感じさせずに三人の後方に居た。

「この反応……サーヴァント!？」

「……さっきの奴等よりは強そうだな」

「さ、下がってください先輩! あの二人は、歴史に残った英雄が現界したサーヴァントなんです、さっきの骸骨兵とは次元が違いすぎます!」

そんなマシユの言葉を聞き流し、士は前に出る。そしてデイケイドライバーを腰に巻いた。

「歴史に残る英雄の力を使うって言うのなら、俺も同じだ」

そして、ライドブツカーからカードを取り出す。

今、^{デイケイド}世界の破壊者の新たな戦いが幕を開ける。

破壊者の資格

「変身」

『KAMEN RIDE・DECADE!』

左右のサイドハンドルを引きバックルを90度回転させ、カードを装填しサイドハンドルを押し込むと、デイケイドライバーを通してカードという形で二次元に封じられたライダーのエネルギを三次元へと解放し、内部の『トリックスター』と呼ばれる秘石がエネルギを具現化させる。

九人のライダーの幻影が士に重なり共に、未知の鉱石『デイヴァインオレ』により構成されたスーツが士の体を包み、頭部に七枚の『ライドプレート』が刺さるように装着されると、モノクロのアーマーにマゼンタカラーが彩飾されていく。

そして、士は『仮面ライダーデイケイド』へと変身した。

「さて、片付けるか」

「……ソウカ。貴様ガ『デイケイド』カ……」

「面白い。ソノ首ヲ撥ネ飛バシ、聖杯ヘノ生贄ニシテヤロウ」

布のようなものを纏った片方の影は口元と思わしき部分を吊り上げほくそ笑み、二人

の影は槍や短刀といった各々の得物を構える。デイケイドもまたライドブツカーをソードモードにし、刃を撫でるようになぞり、構えた。

「マシユ、所長を頼むぞ」

「……は、はい！」

「な、何なのよこれ……どうなってるの!？」

サーヴァントの襲来と未知の姿へその身を変えた土という、脳を混乱に陥れるのに充分な状況に狼狽えるオルガマリーを後ろに下げ、マシユは地面に設置したままの盾を手に持ち、構える。

先に仕掛けたのは槍を持つ大柄の男の影。繰り出される連続突きをデイケイドはライドブツカーのプレート部分を盾にして受け止め、いなし、弾きながら肉薄する。

「ヤルナ、デイケイド……ダガ、マダコレカラダ！」

「お前に付き合ってる暇は無いんでな。これで終わりだ」

ライドブツカーの刃を槍と拮抗させながら、素早く左手でサイドハンドルを開いてカードを取り出し、落とすように装填し、サイドハンドルを押し込む。

『ATTACK RIDE:SLASH!』

機械音声と共にカードから解放された次元エネルギーがライドブツカーの刀身を分身させ、槍を影の手から弾き飛ばし、一振りでも連続の斬撃を叩き込み、影は断末魔の声

を上げながら消滅した。

「さて……」

残るもう一体の影も倒す為、デイケイドは周囲を見渡す。しかし、もう一体は既に消えていた。

「……逃げたか？」

「逃ゲルモノカ」

「！そこか！」

呟いた直後後ろから聞こえた声にデイケイドは振り向くが、既に何も無く。返答の代わりのように短刀が飛んでくるが、素早くライドブッカーをガンモードに変形させ撃ち落とす。

「闇ニ潜ムハ我等ガ得手……サア、見ツケテミルガイイ……」

「……大体わかった。マシユ、しつかり盾で守れよ」

「えっ？」

そう言うときデイケイドはトリガーを押しながらその場を中心に一回転。デイケイドの周囲に弾丸がばら撒かれ、マシユは困惑しつつも言われた通りに己とオルガマリーの身を守りきり、近くの瓦礫に身を隠していた影は弾丸を避ける為に空中へ飛び上がった。

「やはりそこか」

『ATTACK RIDE:BLAST!』

ディケイドは出てくるのを既に理解していたかのように、再びカードを装填し、先程のようにライドブツカーを分身させ、弾丸は自動的に影を追いかけて、連続で影の体を撃ち抜き、消滅させた。

「……こんなもんか」

ライドブツカーをブツクモードに戻して元の位置に戻すと、手についた埃を落とすように手を払うと、マシユ達へと近づいていく。

「マシユ、もういいぞ。盾を戻せ」

「は、はい……」

マシユが盾を地面に戻すと、再び先程の空間が広がる。すると、マシユに守られていたオルガマリーが声を上げた。

「門矢 士……貴方は、何なのよ」

「……俺は通りすがりの仮面ライダー……まあ、ディケイドだ」

ディケイドが冷静に告げると、背後からパチパチと拍手する音が響いた。

「中々やるじゃねえか、仮にもサーヴァントを一撃とはな」

「……誰だ」

デイケイドは振り向きながらカードを取り出そうとライドブツカーに手をかけるが、謎の力で取り出そうとしていたカードは弾き飛ばされた。

「おいおい、話くらい聞いてくれてもいいんじゃないやあねえか？」

そこに立っていたのは、杖を持ち、フードを被った男性だった。彼はフードを外し、青い髪と赤い瞳を露にしながら口を開く。

「オレは『キャスター』。この聖杯戦争に呼ばれたモンだ。敵対する気はねえよ」

バトル援軍・新サーヴァント

『聖杯戦争』。

それは万物の願いを叶える『聖杯』を奪い合う戦い。

七人のマスターと、彼らと契約した七騎のサーヴァントがその覇権を争い、最後に残った一組のみが、聖杯を手にし、願いを叶える権利が与えられる。

「……まさか、日本で聖杯戦争が行われていたとは……」

「……気にするのはそこじゃない。どうしてこんな事になってるのかだ。単なるサーヴァント同士の戦いで、こんな事になるか？」

驚くマッシュに対して変身を解除した士は冷静に告げる。そして、キャスターの方へと向き直った。

「……ここ何が起きたか、あんたは知ってるんだろ？ 教えてもらおうか」

「いいぜ。教えてやるよ」

キャスターは近くの瓦礫に腰を下ろし、士達にも座るように促してから事の顛末を語り始めた。

「まず起きたのは、聖杯戦争のすり替わりだ。街は炎に包まれ、人間は居なくなり、

サーヴァントだけが残った。

そして、次はセイバーの突然の凶暴化だ。アイツ、水を得た魚みたいに暴れ始めて、他のサーヴァント達を襲い始めやがった。そして、オレ以外は皆倒された。残るはオレとセイバーだけ……と思いきや、セイバーに倒されたサーヴァントは何故か座に戻ることなく留まり、暴れ始めた。しかもサーヴァントを優先的に狙ってだ。今のところ残っているのはオレ一人だけだから、オレだけが狙われるはずだったんだが……少し事情が変わったみてえだな」

キャスターは行儀よく膝に手を置いて瓦礫に座っているマシユを見る。少し考え察したのか、マシユはハツとして口を開いた。

「まさか……さっきのサーヴァント達は、私を狙って……？」

「多分そうだろうな。オレは魔力を隠してなるべく奴等から遠く離れてたから、突然近くに現れた魔力に惹き付けられたんだろう」

「……それでは、私は離れた方が……？」

「バカ言わないで、マシユ。貴方が今離れたら誰が私達を守るのよ」

「しかし……」

「まあ、マシユが居なくなったら困るのは事実だ。正直、俺と所長の二人きりなんてたまったもんじゃない」

茶化すように土がわざとらしくため息を吐いて言うと、オルガマリーが声を荒げる。

「はあ!?! 私の方こそお断りよ! こんな無愛想で不敬な俺様男なんかと一緒になんてね!」

「何っ……………?」

「……………ふふふ……………」

とんでもない言い様に流石にカチンと来た土はオルガマリーと互いに睨み合う。まるで漫才のようなその光景は、知らず知らずの内にマシユの顔には笑みが浮かんでいた。

「はっはっは、妙な奴等だなまったく。さて、本題に話を戻すとするか」

ケラケラと笑っていたキャスターは笑顔を消し、地面に杖の先端で適当な町の地図を描きながら言う。

「おおかたあんたらはこの聖杯戦争の異常解決の為に来たんだろ? なら目指すべきはここだ」

そう言いながらキャスターはある点を杖で小突いた。

「ここに、この街の心臓である『大聖杯』がある。あんたらが探せば良いものはそれだ。だが、そう簡単にもいかない。問題はまだまだ多いからな」

「問題……………?」

「大聖杯にはセイバーの野郎が居座つてやがる。オレ一人じゃ到底勝ち目は無え。せめてランサーで呼ばれてりゃ、一刺しだつてのになあ……」

頭をポリポリと搔きながら、キャスターは残念そうにため息を吐く。

「まあいいや。次の問題は、セイバーにやられて汚染されたアーチャーとバーサーカーだ。バーサーカーは迂闊な事が無けりや滅多には近付いてこないから、少し遠回りすりゃいいが、アーチャーが少し面倒だ。その名の通り弓兵だから眼が良い。大聖杯に行くなら、最低でもこいつとセイバーを相手しなきゃならねえ」

「……大体わかった」

「……り、了解です」

「……………」

キャスターの話を聞くと、士はいつもの一言で済ませ、マシユは不安そうな顔をしつつも了承し、オルガマリーは目を閉じ、顎に手を当てて少し考えていた。

「……所長？」

『待ったマシユ。彼女は今、何か打開策を考えているようだ』

考えは纏まったのか、オルガマリーは目を開き、真剣な目付きで士を見つめ、言った。

「門矢 士、こちらにも英霊を呼び出すわよ」

オルガマリーと士は、地面に置かれたマシユの盾を見下ろしていた。盾は光に包まれており、静かに辺りを照らしていた。

「いい、門矢 士？ さっき教えた英霊召喚の方法は？」

「……………この石を三つ、盾の中に放り込む。それだけだろ？」

「ええ。始めなさい」

言われた通り士は盾に向けて虹色の『聖唱石』を三つ放り込む。すると盾から光が浮かび上がり、回転して広がると、一気に収束し、周囲を強い光が包んだ。

突然だが、『触媒』というものを知っているだろうか。召喚を行う際、英霊となった人物に縁のある物を召喚陣の中へと置けば、それは触媒となり、ランダムに英霊が選択される中で、ほぼ確実にその人物を呼び出す事が出来る。

そして、先程キヤスターと出会った時の事を覚えているだろうか。突如現れた彼を士は警戒し、あるカードを使おうとするも彼の魔術により弾かれた。

もしそのカードが『召喚陣として置いてあったマシユの盾』の上に落ちたら。

それで召喚を行ってしまったら。

呼ばれる英霊はただ一つ。

「……………ああ？ 何だこゝはあああ!？」

「お前は……」

「お、鬼のサーヴァント…!?!」

「誰が鬼だコラア！オレは『イマジン』だったの！」

二本の角に紅い身体。刺々しいその見た目はまさに鬼そのものだが、彼は鬼ではない。

「モモタロス……なぜお前が？」

「こつちが聞きてーよ！」

彼の名は『モモタロス』。仮面ライダー電王である『野上良太郎』青年と契約した『イマジン』である。

超トレーニングの乱入者

時の列車『デンライナー』。

『時の砂漠』と呼ばれる異空間を走り、時を越えるこの列車に普段はモモタロスは良太郎やハナ、他のイマジジン達と共に乗車している。

しかし、モモタロスが言うには突然デンライナーが止まってしまったという。

「線路がよ、こう……パツと消えちまったんだよ、前も後ろもな。そんでお手上げだと思つてたら、いきなりここに呼び出されたつて訳だ。チクショー、ナオミのコーヒー飲もうとしてたところなのに良いとここで呼び出しやがつてよお！つうかあちいなここ!!」

……まあそれはそれとして。現在マシユはキヤスターと共に修行に励んでいた。

経緯はこうである――

「……嬢ちゃん、アンタ宝具を使えねえな？」

「……はい。私は、この盾やこの姿が何の宝具に由来する物なのかも理解できていません。この力をくれた英霊は、すぐに消えてしまいましたから……」

「……よし、じゃあオレが出せるように鍛えてやるよ。立ちな、宝具を出せるようみっちり鍛えてやるぜ」

——というわけで、現在マシユはキャスターの攻撃を受け続けているのだ。魔術により飛んでくる光弾を盾で何度も弾き続けているが、マシユは既に限界に近かった。汗を滝のように流し、ゼイゼイと息を切らし、足を震わせながら、なんとか立ち続けていた。

「オラオラどうした！そんなんじや宝具なんざ使えねえぞー！」

「ハア…ツ、ハア…ツ！」

「そら行くぞ！しっかり防げ！」

「っ……………ぐうっ！」

キャスターは少し強めに光弾を放つ。マシユも必死に受け止めるが、デミ・サーヴァントであってもやはり人間。自分を支える体力もほぼ残っておらず、マシユは後ろに倒れかける。

「……………おい、やり過ぎじゃないのか」

モモタロスとオルガマリーと共に座りながら眺めていた士は口を開く。流石に止めるべきと思い、デイケイドライバーを巻こうとするが、バツクルを持つ手をオルガマリーが掴み、止めた。

「……………何すんだ、放せ」

「やめなさい門矢 士。これはマシユへの試練なの。マシユ自身が乗り越えなきやい

けないのよ」

「……………わかつてる。だが——」

「あの子は、今はアンタのサーヴァントよ。もし手を出すなんて真似をしたらどうなるかわかる？ きつとあの子は心から強くなりきれず、必ず肝心な時に不安になるわ。マスターのアンタが、あの子の不安を煽るような事をしてどうするのよ」

「……………わかった。だが、本当に殺す勢いになったら止めるからな」

真剣な声色と落ち着いた口調でオルガマリーは士を諭す。士は悪態を吐きながらバックルをしまい、再びマシユへと視線を戻す。

「これならどうだ？ 受け止めきるにや宝具を使ってみなア！」

「くっ……！」

キャスターは先程の光弾を連続でマシユに向けて放つ。マシユは足元を隆起させる程に力を込め、盾を力一杯支えるが、盾で受け流し、近くの瓦礫に当てるのが精一杯だった。

「……………ほう、中々堅いじゃねえか。宝具を使わないまま防ぎきるたあな」

「ハアツ……！ ハアツ……！ まだ、倒れませんか……！」

しかし、キャスターはさらに出力を上げた光弾を放とうと、杖により多く魔力を込め始める。

——しかし。この時誰もが予想出来なかった事態が発生した。

——ズガアアアアアアンツ!!!

「■■■■■■■■■■」
ツ
!!!!
」

「何!?!」

「えっ!?!」

「何じやありやあああああ!?!」

「ひいつ!?!」

「あれは…!?!」

突如炎と瓦礫をくぐり抜け、巨人のような影がマシユとキャスターの間に割り込んだのだ。

「おいおい、よりによってこのタイミングかよ……!」

そう、このサーヴァントこそがキャスターが警戒していた『バーサーカー』だった。

ライバル怪盗いらっしやいませ

「クソツ、戦闘の音を聞きつけて来やがったってのか!？」

「修行は中止だ、離れろ!」

バーサーカーの突然の乱入に驚愕し、キャスターは距離を置いたため下がる。

しかし、眼前の恐怖に捕らわれたマシユは足を動かすことが出来なかった。

「マシユ、逃げなさい!早くっ!!」

「あ……あ……」

既に体力もほとんど限界を迎えているのも相乗し、マシユの足は棒切れにでもなったかのように動かない。

勿論近くに居る動けない獲物を見逃す訳は無く。バーサーカーは雄叫びのような声を上げながら大剣をマシユに向けて振り下ろした。

「■■■■■■■■■■——!!」

「っ……………」

「待てコラアアアッ!!」

死を覚悟し目を閉じるマシユだが、怒声と共に金属同士がぶつかり合う音が響き、マシユへの攻撃はギリギリの所で停止する。

マシユが目を開くと、そこには赤い青竜刀型の武器『モモタロスオード』を手にマシユの前でバーサーカーの攻撃を受け止めているモモタロスの姿があった。

「も、モモタロスさん……?!」

「いい加減に俺にも戦わせろつてんだよ！マシユマロ！お前さつさと逃げろ！どうせそんなだけ疲れてんだから戦えねーだろ！」

「マシユマっ……!?わ、わかりました……！」

「ナイスタイミングだモモタロス、変身！」

『KAMEN RIDE : DECADE!』

モモタロスに間違った名前と呼ばれ方をしつつも、マシユはオルガマリーの近くまでフラフラと退く。

そして士はダイケイドへ変身し、モモタロスがバーサーカーの大剣を根性で弾き飛ばすのとほぼ同時に、ライドブッカーでバーサーカーへと切りかかった。

「ハッ！」

「どおりやああああ!!」

「■■■■■■■■■■!!!」

互いの武器が確かにバーサーカーの肉体に傷を負わせるが、瞬時に再生するのを見た
 デイクイドは一步退き、ライドブツカーからカードを三枚取り出す。

「速攻でケリをつける他無いな」

『KAMEN RIDE:FAIZ!』

『FORM RIDE:FAIZ AXEL!』

デイクイドは一枚目の『仮面ライダー555』のカードで555の姿になり、さらに
 二枚目のカードで555のパワーアップ形態である『アクセルフォーム』へとさらに姿
 を変える。そして、^{デイクイド}D 555はアクセルフォーム最大の特徴である能力を発動させ
 る為、左手首に備わった『ファイズアクセル』のスイッチを押す。

『START UP』

スイッチを押すと同時に十秒のカウントが始まり、^{デイクイド}D 555以外の世界の動きが
 減速する。正確には彼自体がが加速しているのだが。

アクセルフォームは、ブレスレット型のファイズアクセルのスイッチを押すことで、
 十秒の間だけ自分の速度を通常の一千年に跳ね上げる能力が存在する。

そして、三枚目の金色に輝く555のライダークレストが描かれたカードをベルトに
 装填した。

『FINAL ATTACK RIDE:FA・FA・FA・FAI Z!』

右足に『ファイズポインター』が出現すると、そのままDディケイト 555は駆け出し、赤の円錐状の光を五連続でバーサーカーの体へロックオンし、僅か十秒の間で全ての光を潜ってバーサーカーの体へ『アクセルクリムゾンスマッシュ』を叩き込んだ。

『THREE、TWO、ONE::TIME OUT』

ファイズアクセルが加速終了を知らせると共にアクセルフォームは解除され、通常の555の姿へと戻る。Dディケイト 555は崩れゆくバーサーカーの姿がそこにある事を確信し、余裕の態度で後ろを振り向く。
しかし。

「■■■■■■■■——ツ!!」

「馬鹿な……!?!」

「土、避けるおっ!!」

モモタロスの声も間に合わず、Dディケイト 555は近くの瓦礫にクレーターを作る勢いで、

全く攻撃の効いた様子の無いバーサーカーに吹き飛ばされた。

「ぐ……っ!」

「先輩……!!」

ダメージが多だったのか、Dディケイト 555は呻きを上げながら変身が解除されてしま

う。マシユはオルガマリーと共に士へ駆け寄った。

「先輩！しっかりしてください先輩！」

「クソツ…油断した……！」

「その体じゃ無理よ、止めなさい！」

すぐに再変身しようとする士だが、カードを持つ手をオルガマリーが止めた。サーヴァントの中でも特に攻撃力の高いバーサーカーの一撃が直撃したとあっては、いくらスーツが守ろうと士本人には確実にダメージが通っていた。

その一方、キャスターと協力しながらモモタロスはバーサーカーと渡り合っていたが、流石に体力自慢のモモタロスにも限界が近づいていた。

「ンニヤロオツ！」

「そらッ！」

モモタロスはバーサーカーの腰を蹴り、そのまま斬りつける。キャスターは頭部目掛けて光弾を放ち、わずかながらバーサーカーの視界を奪った。

「■■■■——！！」

「くそつたれ、ホントに攻撃効いてんのか!？」

「諦めんなよ、鬼！効いてなくても、やるしかねーだろ！」

「だから鬼じゃねえっ！ああクソツ、なんか良い肉体でもありや良いのよ……！」

文句を言いながらバーサーカーの攻撃を弾くモモタロスと、遠隔から光弾を撃ち続けるキヤスター。

モモタロスは憑依できそうな人間を探そうと周囲を見回すが、無論そんな人間は一人しか居ない。一か八か、モモタロスは土へむけて大きく声を上げる。

「おい土！お前の体使つても良いか!!」

「……ああ、良いぞ！好きなように使え！」

今自分は動けないが、モモタロスが憑依すれば違うと悟った土は腕を広げ自分の肉体のコントロールを手放し、モモタロスの体は透明になり、土の中へとモモタロスは飛び込むように憑依した。

土の髪の一部と瞳が赤くなり、髪型は髪を全体的に跳ねさせたオールバックへと変化する。

「いよっしやあー！こっからは本気だぜえ！」

モモタロスが入った土は、ディケイドライバーを外し、その代わりに『デンオウベルト』が腰に現れ、四つの『フォームスイッチ』の内、一番上の赤のスイッチを押し、手に持った『ライダーパス』を『ターミナルバックル』の前へセタツチする。

「変身ッ！」

『SWORD FORM』

モモタロス

M士の体にフリーエネルギーによって生成されるスーツが装着され、さらにモモタロスの赤のオーラアーマーが合体し、そして桃の形を連想させる赤の『電仮面』が変形しながら装備される事で、『仮面ライダー電王 ソードフォーム』へとM士は変身した。

腰の左右に出現した『デンガツシャー』を剣状に組み上げると、電王はそのままバーサーカーへ向かっていく。

「行くぜ行くぜ行くぜえ!!」

「■■■■■■■■■■——!!」

電王はバーサーカーの大剣による攻撃を潜り抜け、デンガツシャーでバーサーカーの肉体を切り裂く。しかし、一太刀浴びせた程度ではバーサーカーの回復力ですぐに治された。

「チツ、ならコイツで一気に決めるぜ!」

『FULL CHARGE』

バーサーカーから離れ、ライダーパスをもう一度セタッチすると、音声と共にベルトからデンガツシャーへとエネルギーが伝わり、デンガツシャーの赤く染まった刀身『オーラソード』が勢いよく射出される。

「俺の必殺技……パート2!」

指揮棒のようにデンガツシャーを右から左へ振るうと、射出された刀身がその軌道の通りにバーサーカーの肉体を切り裂き、次は左から右へとデンガツシャーを振るうと、再び同じ軌道でバーサーカーを刀身は切り裂き。

トドメにデンガツシャーを振り上げ、一気に振り下ろすと、刀身は一気にバーサーカーを両断する——
ハズだった。

——ガキンツ!!

「んだとおっ……お、俺の必殺技が……!?!」
バーサーカーにはほとんどダメージは通っておらず、最後の一撃は刀身が弾き返されてしまった。

次はこちらの番とでも言うように、バーサーカーは大剣を連続で振るい、電王を追い詰めようとする。

■■■■■■■■■■——ツ!!」

「うお、てめつ、ちよ、待てコラツッ!」

士の肉体が万全であれば大したことは無かったかもしれないが、ダメージを受けた肉体に遠慮したのか、モモタロスには反撃が出来ないまま、近くの瓦礫まで追い込まれてしまう。

「や、ヤベエツ……!!」

「■■■■■■■■■■!!!」

「おいコラ、デカブツ！オレを忘れてんじやねえつ！」

キヤスターも何とか援護に回り光弾を放つが、バーサーカーの肉体にはかすり傷一つも付きはしなかった。

「何っ…!?コイツ、まさか——」

先程の攻撃が一切通用しなくなった事からキヤスターは一つの結論に辿り着く。もしこれが本当だとすれば、自分達ほとんど悪手を打っていた事になると、キヤスターは確信した。

しかし、その時。

「その通り。このサーヴァントに連続の攻撃はいけないのさ。何しろすぐに肉体が対処しちゃうみたいだからね。だから……」

『FINAL ATTACK RIDE:DI・DI・DI・DIEND!』

どこからともなく声が響き、突如現れた青緑色の光のカードの渦が、バーサーカーの

心臓をロックオンする。そして、光線がバーサーカーの胸を貫き、バーサーカーは消滅した。

「こんな風に一撃で決めなきやいけないのさ」

「この攻撃……まさか」

デンオウベルトを外して変身を解除し、モモタロスが体から出た士は、声の主が近づいてきている事を察知する。おおよそわかっているが。

「やあ士。ナマコは食べられるようになったかい？」

変身を解除し、そこにはニヒルな笑みを浮かべる青年、『海東 大樹』が立っていた。

ノーブルファインタズム

「海東……」

「やはり君もこの世界に来てたんだね、似合ってるよその服と髪型。ところで、珍しく一人旅かい士？」

「……生憎だが夏ミカンもユウスケも、この世界に来た時に別れたみたいだからな。今はその後輩と、うるさい所長とイマジント、場数を踏んでそうな英霊とここを探索中だ」

「ふむ……」

事情を聞き、頷きながら順番に士の後ろに居る三人の顔を海東は見る。そして最終的に、マシユへと視線を合わせた。

「ねえ君、名前は？」

「えっ、あ、マシユ・キリエライトです……」

「ふーん……士は今、彼女に夢中なんだね。嫉妬しちゃうな〜」

海東のマシユへの視線が品定めをするような目が変わる。若干の恐怖を覚えたマシユは少し後退った。

「妙な事を言うな。それより、何しに来た？」

「もちろん、この世界のお宝を頂く為に決まってるじゃないか。僕が何をしているか忘れたかい？」

海東 大樹は、世界を股に掛ける怪盗である。彼は時には非人道的なものも使い、様々な手段でその世界の『お宝』を盗み出し、土の邪魔をすることも多々あった。

「……それよりも土、何か悩んでるみたいだね。手伝ってあげるよ」

「………何？」

『KAMEN RIDE』

「変身」

『DIEND!』

海東はライダーカードを見せるように左手に持ち、銃型の変身装置『ディエンドライバー』を右手に持つと、ライダーカードを装填し、銃身を前に押し出す。土のディケイドライバーと同様に、音声と共にカードに封印されたエネルギーが実体化の待機状態に入る。

そしてディエンドライバーを真上に掲げ、掛け声と共に引き金を引くと空へとライダーの紋章が発射され、紋章は13枚のライドプレートへと変化し、赤、青、緑の幻影が海東に重なる、ディケイドと同じくディヴァインオレで構成されたスーツが海東を

包む。

そして、浮かんでいたライドプレートが頭へ刺さると、モノクロのスーツはシアンカラーに彩飾されていった。

「海東、お前まさか——」

『ATTACK RIDE：BLAST!』

『仮面ライダーディエンド』へと変身した海東は、無言でマシユへと銃口を向け、カードを装填する。そして引き金を引くと、土が使うものと同様に銃口が分身し、マシユへと一気に迫った。

「っ、あああっ!」

マシユは盾を構え、何とか踏ん張ろうとするが、先程自分を恐怖で動けなくしたバーサーカーを一撃で撃破したような者が相手だと体が怖じ気付いたのか、力なく吹き飛ばされた。

「チツ、味方のフリしやがった敵って訳か!」

「邪魔しないでくれよ」

『KAMEN RIDER：RIO—TROOPER!』

キャスターは杖を持ち、ディエンドへと向かっていこうとするが、ディエンドライバーの持つライダーカードに描かれたライダーを召喚する能力で呼び出されたライ

ダー兵隊、ライオトルーパーズに囲まれてしまう。

「盗っ人野郎、てめえ勝手におっ始めてんじやねーぞ！」

「君も邪魔だよモモタロス、彼と遊んでなよ」

『KAMEN RIDE : SASWORD!』

「ケツ、またソイツか！今度はブチのめしてやるぜえ！」

サソリを象つた紫の仮面ライダー、サソードを召喚すると、このライダーと以前戦つた記憶があるモモタロスは武器を構えて突撃する。

「さて……土、行くよ？」

「……ああ、来いよ海東」

『FINAL ATTACK RIDE : DI・DI・DI・DIEND!』

ディエンドは必殺技のカードを装填し、銃口を土へと向ける。光のカードがライオトルーパーズとサソードを回収しながら土の胸をロックオンする。

しかし、まるで待っているかのように土は動こうとしない。

「おい土！何してやがんださっさと逃げろ！」

「ボーツと突っ立ってるな、死ぬぞ！」

「門矢 土！逃げなさい、早く！」

モモタロス、キャスター、オルガマリーが必死に声を上げるが、土は一步も動かなかつ

た。

先程の人物に吹き飛ばされ、私は気を失いかけているのだろう、意識や視界がハッキリとしていない。

《……マシユ……マシユ!》

誰かが私を呼ぶ。しかし、その声を私は聞いたことが無い。誰かの必死の呼び掛けも無下にしてしまうようでも申し訳ないが、私は重い瞼を閉じた。

《マシユ……俺はここに居る、目を開けてくれ》

まだ、謎の声は聞こえる。軽くなつた瞼を開くと、そこは炎上している冬木ではなく、真つ白な景色が辺りに広がる奇妙な空間。

さらに、まだ奇妙なものはある。今、私の前に立っている一人の男性と思わしき人物。彼の体は全身が黒く、大きな真つ赤な目、今の私と同じマークが左胸にあり、彼の頭や胸の辺りや手首足首などに刻まれている黄色と赤のライン、そして白いベルト。

ただ、彼の大きな目は見えるが、顔の全体像だけが霞がかつて見えない。

《よかつた、ようやく俺に気付いてくれたか》

《貴方は、誰ですか……?》

私に力をくれたあの英霊とも違うこの人物に、私は疑問点が幾つも湧いてくる。何故

私を知っているのか、何故この場所に彼と共に居るのかと、挙げ出せばキリがないが。

《俺は―面―イ―ブラ―、君に力を与えた英霊の一人だ》

ノイズがかかったように一部が聞こえなかったが、彼が私に力を与えたとはどういう事だろうか。確か、私に宿った英霊は一人の筈では……？

《……時間が無いな。このままでは士くんがやられてしまう》

《えっ……先輩が、危ないんですか？》

《ああ。だから俺は君をここに呼び出した。これから言うことをよく聞いてくれ》

私は頷く。先輩に危機が迫っているというのなら、私は放っておく事など出来ない。

《君に力の使い方を教える。時間がないから手短かに話すことになるが――》

そして、士達へと視点は戻る。

デイエンドは引き金を引き、士へとエネルギー波を発射した。士は仲間の必死の呼び掛けも無視し、動きはしない。このままでは確実に士はバーサーカーと同じように消し飛ばされるだろう。しかし、間に合わない。

絶望しかけたその時だった。

「ああああああああ——っ!!」

なんとマシユが土の前に飛び込み、盾を地面へ突き立て、構えたのだ。

「……………ようやく来たか、マシユ」

さらに、その盾から魔法陣のようなものが展開され、エネルギー波から完全に土とマシユを守った。

「……………ようやく使えたみてえだな、宝具を」

キャスターは弟子の成長を喜ぶ師のようにニヤリと笑うが、これだけでは終わらなかった。

「先輩を傷付ける者は……………誰であろうと許しません!!」

マシユは盾から手を離し、腹部の前で握り拳を合わせる。すると、ベルトが光を放ちながら赤い部分が回転し、マシユにエネルギーを供給していく。

マシユは再び盾を持つと同時に飛び上がり、マシユのエネルギーが伝わり燃え上がる盾をダイエンドに向け構える。

「たああああああ——っ!!」

そのまま重力に従いデイエンドへと急降下し、盾を使ったタツクルはデイエンドを大きく後退させる。

しかし、まだ終わらない。マシユは再び盾を地面に突き立て、今度はそれを踏み台にしてより高く飛び上がる。

「でやあああああ——っ!!!」

燃える右足を前に突き出し放ったキックは、デイエンドを吹き飛ばし、大ダメージを与える。

「これは、まずいな……一旦退かせてもらうよ」

『ATTACK RIDE：INVISIBLE!』

カードを一枚装填し、デイエンドは透明化してさつきと逃げていった。

ぜえぜえと息を切らしていたマシユは、土の方へ振り向く。

「やりましたよ、先輩……私、宝具を出せました……」

「……結構痛かったなあ」

海東は変身を解除し、近くの瓦礫へと隠れていた。先程のタツクルやキックのダメージは予想以上だったのか、体を撫でて呻く。

「全く……患者役も楽じゃないね。土が困ってたからやってあげたけど」

愚痴をこぼしながら、海東は燃える街へ消えていった。

ツンツン不器用の破壊者

「やったわね、マシユ。おめでどう」

「スゲーじゃねーかマシユマロ、お前強えんだな！」

「やるじゃねえか嬢ちゃん、よくやったな」

「はい、ありがとうございます——」

マシユが宝具を使えるようになった事に対して、皆が祝福の言葉を送る中、照れつつもマシユは頭を下げる。しかしそこで体力が完全に尽きたのか、マシユは倒れた。

「うおおおい！しっかりしろマシユマロ！」

「マシユ！」

「だ、大丈夫です……少し休めば、また動けます……」

幸いモモタロスとオルガマリーが急いで受け止めたが、マシユは苦笑いを浮かべ、平気そうに笑いかける。

しかし、何か違和感を感じたキャスターは土の方に顔を向け、言った。

「……あの嬢ちゃん、凄かったぜ。褒めてやらねーのか？」

しかし当の土は、周囲を胸に下げているピンクのカメラで撮りながら、興味無さげに

言った。

「……別に。サーヴァントは宝具が使えて当たり前なんだろう？なら当たり前の事が出来るようになったただけだろ」

「ちよつと……何よその言い草は？」

しかし、士の言い分が癪に障ったオルガマリーはマシユから離れ、睨みを利かせながら士の前に立つ。

「仮にもアンタのサーヴァントが身を挺して護ってくれたっていうのに、マスターのアンタは感謝やお礼の一つも無いわけ!?そんなサーヴァントとの信頼関係も築けないような奴、マスター失格よ!」

「……別に、あの程度なら俺だけで充分だ。寧ろあそこで宝具を使えてなかったら俺が犬死にする所だったんだが」

「何ですって……!」

「この際はつきり言つてやる。お前らは邪魔なんだよ、俺はこの先一人で行く。ついてくるなよ」

そう吐き捨てるように言い放つと、士はさつさと大聖杯があると言われた洞窟へと向かっていった。

「お、おい……言い過ぎだぜ士!」

ピリピリとした空気から逃げるように、モモタロスもマシユをオルガマリーに任せ、士を追いかけ走る。その様子を見ていたキャスターは無言で佇んでいた。

やがて士とモモタロスが見えなくなると、疲労困憊の状態のマシユは盾を支えに立ち上がった。

「マシユ、まだ無理をしては駄目よ。第一、あんなマスターの為に戦うことなんてないわ。貴方が傷付いても平気でいる最低のマスターなのよ？」

オルガマリーは肩を貸してマシユを支えながら言うが、マシユは苦し紛れのような笑みを浮かべてオルガマリーから離れる。

「……………所長、私は大丈夫です。先輩の事なら、それなりにわからせていただきました。さあ、行きましょう！早く先輩に追いつかないと！」

そう言いながら走り去っていくマシユに、オルガマリーは開いた口が塞がらなかつた。

「ど……………どうということなの……………？なんで、あんな事言ったマスターを信頼できるわけ……………？」

『あー、あー……………所長、ちよつと良いですか？』

オルガマリーが呆気に取られながら呟いていると、ロマニからの通信が入り、画面が

映る。

「な、何よ……?」

『そのですね……一応僕も医療スタッフなので、土くんやマシユのバイタルチェックや健康状態の管理は今も欠かさず行っているんですけど……先程の土くんの発言というか暴言はですね、その時のバイタル的に多分……照れ隠しかと』

「……………はあ?」

オルガマリーは素っ頓狂な声を上げた。

そして思った。

「アイツ……………めんどくさっ!!」

一方その頃、土はついてくるモモタロスに目もくれず洞窟内部をずかずかと突き進んでいた。

「おい土、聞けよコラッ!」

「……………」

「……………聞けつてんだよコンニャロー!!」

「ああもうやかましい……………何だ」

「最初から反応しろよ、つたく……………お前よお、なんでマシユマロのこと避けてんだ?」

モモタロスが疑問を投げかけると士は足を止め、前を見ながら呟くように言った。

「……ああするしか無かったとはいえ、マシユに宝具を覚えさせる方法が強引過ぎた。あそこで俺がさっさとバーサーカーを片付けていれば、もう少し安全に覚えられた筈だ……別に、負い目を感じてる訳じゃないからな。覚えておけ」

そう言うのと士はまた歩みを進める。モモタロスは少しその場に立ち尽くしたが、小さく笑うとまた士を追いかけた。

——その光景を見ている者の存在も知らず。

「——下らん友情ごっこは終わりだな。さっさと消えてもらおうか」

影の弓兵はそう言いながら黒き弓に矢を番える。『千里眼』の力で遥か遠くの目標へと狙いを定め、弦を引く。

——しかし、それを邪魔する者が二人。

「そうはさせないよ」

「邪魔すんな、良いところなんだからよ」

「何ッ……!」

銃弾と光弾が弓兵へほぼ同時に放たれる。飛び退き回避した弓兵は、洞窟の中に広がるこの空洞の天井近くに現れた者を見上げる。

「やあ、王様を守る忠実な騎士様。お城のお宝を頂きに来たよ」

「残るはテメーとセイバーの二騎だけだ。覚悟しな」

そこに居たのは蒼い怪盗と青い術者。彼らは合流し、別のルートからこの空洞へと辿り着いたのだ。

「馬鹿な……！入り口はライダーが守っていたハズ、どうやって……」

「無論、倒させてもらったよ。こう見えて僕は手段は選ばないのでね」

「二対二つてのは少し流儀に反するが、この際言ってもいられねえ。何しろオレ達も必死なんぞな」

余裕の笑みを浮かべながら二人は飛び降り、着地する。杖と銃を構え、弓兵と一触即発の空気が空洞を満たす中、士とモモタロスもまた合流した。

「……海東！」

「ありや、盗つ人野郎にマジシャン野郎じゃねーか！どうやって先回りしやがった!？」
「つ……！おのれ、ディケイドまで合流したか……」

士とモモタロスに気を取られた弓兵の隙を二人は見逃さず、素早くそれぞれの弾を撃ち、爆煙を発生させて目眩ましをしてから、士達の横へと並び立った。

「やるぜ、鬼。女にばっか任せてオレ達男がサボってちやしようがねえ！」

「おうっ！ここからは俺達のクライマックスだぜえ!!」

「行くよ士。たまにはレディの道を切り開こうじゃないか」

「……ああ」

士はダイケイドライバーを巻き、モモタロスにモモタロスオードを構える。

男達の戦いが、始まろうとしていた。

2つの弾、1つの矢

「変身！」

『KAMEN RIDE：DECADE！』

士はデイケイドに変身すると、デイエンドと共に銃弾を撃ち牽制しながら、先へ進もうと駆け出す。

「士、ここは僕が引き受けてあげるよ。君は早く先に行きたまえ。君もだモモタロス」

「……頼む。行くぞモモタロス」

「わあったよ、任せるぜ盗っ人野郎！」

『KAMEN RIDE：KABUTO！』

その場をデイエンドに任せ、デイケイドはモモタロスを掴みあげると二枚のカードを取り出し、まずは『仮面ライダーカブト』の姿へ変身すると、もう一枚を装填する。

『ATTACK RIDE：CLOCK UP！』

カブトの持つ加速能力『クロックアップ』を発動し、モモタロスを連れてその場を離れる。

しかしその時、既に手は打たれていた。

いつの間にか放たれていた赤く輝く魔弾がクロックアップに追い付き、デイケイドの右腕へと命中したのだ。

「ぐあつ……!？」

「うおおああつ!？」

クロックアップが解除され、デイケイドはその場に倒れ、モモタロスは投げ出された。何故クロックアップした状態のデイケイドに攻撃が命中したのか、理由は簡単である。ただ単に移動方向を予測して撃つただのだ。

「どれ程恐ろしい能力を使ってくるかと思っただが……速いだけか。ならば、大したことはしないな」

「ば、馬鹿な……クロックアップが追い付かれるだと……!？」

「雑談の余裕はあるのかね？」

空気を切る音がデイケイドの耳に入る。音の方を向くと、先程の魔弾が軌道を変え、こちらに迫ってきていた。

「ちつ……もうその手は喰うか!」

デイケイドは魔弾を弾こうとライドブツカーを構える。

しかしその時、アーチャーが密かにほくそ笑んでいたのには誰も気付かなかった。

魔弾はデイケイドの目前に迫ったその時、唐突に大爆発を起こし、爆煙が辺りを包む。

「士あああつ!!」

「おいおい、嘘だろ……!」

キヤスターは焦り、モモタロスは叫ぶ。返事は無く、デイケイドが居た場所には爆煙が静かに舞っていた。

「心配は要らない。よく見たまえ」

「ああ……?」

ドサリと音を立てて爆煙から人影が倒れるが、よく見るとそれはデイケイドではなく、デイエンドが呼び出していた『仮面ライダーガイ』だった。ガイをカードに戻すと、デイエンドは晴れた爆煙の中に居るデイケイドへと近付いた。

「海東、お前……」

「どうしたのさ士、平和な世界ばかり回ってきたせいで身体が鈍ったんじゃないか?」

「……うるさい」

「そう拗ねないでよ。早く行きたまえ」

「……わかつている」

『KAMEN RIDER : KUGA』

『FORM RIDE：KUGA DRAGON!』

デイケイドはスピードに優れた『仮面ライダークウガ ドラゴンフォーム』へ変身すると、強化されたジャンプ力で一気に洞窟を飛び上がり、出口へ向かった。

「チツ、逃がすわけには……!」

デイケイドを追撃しようと弓を構えるアーチャーへと、銃弾が迫る。アーチャーは素早く剣を投影し、銃弾を弾いた。

「無視するなよ、君の相手は僕だ。悪いけど、僕は今大事なお宝⁺に傷を付けられて怒っている。手加減はしないぞ」

怒気を孕んだ声でアーチャーを威圧するデイエンド。キヤスターとモモタロスは武器を携え、横で構える。

「……そういや、俺なんで一人で変身出来ねーんだ?……まあいいや、行くぜ行くぜ行くぜ!!」

ふとモモタロスの脳裏に浮かんだ疑問は、燃え上がる闘争心に消えていった。

召喚 ホッパ・ブラザーズ

「鬼、弓を使えねえように押さえろ！」

「任せろおっ！」

魔力をチャージする為に集中しようとするキャスターの指示を受け、近付けば剣を抜かざるを得ない状況に追い込めると素早く判断したモモタロスは一気にアーチャーへ向かって走る。

「接近戦なら彼等も得意分野だろう」

『KAMEN RIDE：KICK HOPPER!』

『KAMEN RIDE：PUNCH HOPPER!』

ディエンドは射撃でモモタロスの進行を援護しつつ、『仮面ライダーキックホッパー』と『仮面ライダーパンチホッパー』を呼び出す。二人のライダーは俯いた状態からアーチャーへと顔を向けるが、ため息を吐きながら再び俯き、愚痴をこぼすように呟く。

「いいよなモモタロスアイツは……どんな奴からも信頼されて……それに比べて俺達は……」

「酷いよな、世の中は……アイツみたいな奴は失敗しても許されるのに、俺達はちよつとの失敗でこのザマだもんな……」

「……僕としたことが盲点だった。彼等が扱いにくいのを忘れていたよ。まあ仕方ないよね」

「ふざけんなバカヤローツ!!」

「余所見をしていて良いのかね?」

「あつ」

自分達の過去の経験からネガティブな発言を繰り返すホッパー達を見て、今頃に彼等の性格を思い出し勝手に納得しているデイエンドに対し、アーチャーの『干将』と『莫耶』と呼ばれる白黒の夫婦刀と必死に斬り合っていたモモタロスは声を荒げる。

無論その隙をアーチャーは見逃す訳が無く、デイケイドに対して放った、黒の洋弓に武器をつがえ、射出し爆破させる『壊れた幻想』プロトシリアンタズムをモモタロスに至近距離で放った。

「ぎやあああああああ!?!」

「わあすごい吹き飛び方」

割りと大惨事なのだが、モモタロスはいわゆるギャグ漫画のように吹き飛び、洞窟の壁に上半身が埋まりながら突き刺さった。

「……この程度か。デイケイドを逃しはしたが、案外その取り巻きは大したことは無さそうだな」

余裕綽々とアーチャーは皮肉を言いながら弓に武器をつがえ、ホッパー達の方へと向

ける。

しかしアーチャーの皮肉を聞いたその時、キックホッパーがピクリと反応する。キックホッパーはアーチャーに顔を向け、言った。

「今……俺達を嗤ったな？」

「アイツは良いよな、兄貴……誰かに必要とされてる……誰かの光になれるんだ……汚してやろうよ、光なんて……！」

キックホッパーの言葉にパンチホッパーも続き、二人はゆらりと顔を上げ、アーチャーを見る。

次の瞬間、二人はほぼ同時にアーチャーへ迫ろうと走り始めた。アーチャーは再び壊れた幻想を放つが、着弾よりも早く二人は行動する。

『R I D D E R J U M P 』

腰に装着したバツタ型の機械『ホッパーゼクター』の後ろ足である『ゼクターレバー』を持ち上げ、音声と共に二人のジャンプ力が更に強化されると二人は飛び上がり、回避。そしてゼクターレバーを戻すと、キックホッパーは左足に、パンチホッパーは右腕へと『タキオン粒子』がチャージされ、必殺の一撃をアーチャーへと放つ。

『RIDER PUNCH
KICK』

アーチャーは弓を身代わりに投げつけるが、ライダーキックは20t、ライダーパンチは19tの威力を誇る。弓程度では耐えられるハズも無く、あつけなく弓は砕け散った。

「外したか……」

「次は当ててやる……」

着地した二人は目の前のアーチャーにキックとパンチのコンビネーションで攻撃を仕掛けた。アーチャーも再び干将と莫耶を投影し、干将でキックを、莫耶でパンチを受け止めながら、ジリジリと後退していく。

「終わりだ……」

「喰らえ……」

遂にはアーチャーは壁際まで追い込まれ、二人はトドメの一撃を放とうと拳と足を構える。生身のアーチャーにとってはライダースーツを纏った二人の一撃をまともに喰らえば間違いなく命取りになる。しかし干将と莫耶で弾くことも、回避する事も不可能に近いこの状況は、完全にアーチャーにとっては詰みだった。

——が、しかし。

『FINAL ATTACK RIDE：DI・DI・DI・DIEND!』

「俺達の順番は……ここで終わりか……」

「やっぱり俺達は……光を掴めないんだね、兄貴……」

アーチャーの目の前に居たライダー達はカードの形に戻り、その代わりに目の前に展開されたカードの渦の中へと吸い込まれていった。

「これで終わりさ」

仮面の下でデイエンドはニヤリと笑みを浮かべ、引き金を引く。デイエンドの必殺技『ディメンションシユート』がアーチャーに迫り、爆煙が辺りを舞った。

「……さて、士を追うとしようか」

デイエンドは後ろを向き、出口へと歩みを進める。

——アーチャーが倒れたかどうか確認もせず。

「バカ野郎、避けろっ!」

キャスターが声を荒げるのよりも速く、爆煙の中から赤の魔弾が飛び出し、デイエンドへと向かっていく。キャスターの声でデイエンドはようやく気が付き、カードを取り

出すも、もう遅い。

『ATTACK RIDE——』

「遅い」

なんとかカードを装填し終わるも、その場で壊れた幻想プロクンファンタズムが発動し、デイエンドは爆煙に消えた。

爆煙から傷ひとつ無く現れたアーチャーはキャスターへと弓を向ける。

「……てめえ、どうやって」

「隠し玉というものは、使うべき状況の為にとっておく物だろうか？ 私にとってはそれが今だった、という事だ」

これでもキャスターは、あのバーサーカーをも一撃で屠ったデイエンドの必殺技の威力を信頼していた。

ただ、デイエンドの必殺技はアーチャーの『防御手段』に対して相性が最悪だったのだ。

『熾天ロウ覆アうイ七アつの円環』と呼ばれるその宝具は、七枚の花弁の一枚一枚が城壁程の硬度を誇る防御宝具。そして何より、その宝具には投擲武器及び飛び道具に対し無敵の概念を持っていた。引き金を引く一瞬の隙を突いて、アーチャーはこの宝具を投影し展開。こうしてデイエンドの必殺技を防いだのだ。

「……残るはお前だけだ。ディケイドも今頃セイバーに斬り裂かれているだろう」
アーチャーは干将と莫耶を投影するとキヤスターに近付いていく。それでもキヤスターは魔力のチャージを止めはしない。

「……捕まえたぜええ……!!」

「何っ……!?!」

過度のダメージを受け、砂のような状態に戻っていたモモタロスが地面から飛び出し、後ろからアーチャーを羽交い締めにしたからである。

モモタロスはそのまま後ろへアーチャーを投げ飛ばすが、空中で一回転してからアーチャーは無事に着地する。しかし、既にモモタロスオードを構えたモモタロスがアーチャーの懐に飛び込み、切り上げる形でモモタロスオードを振るう。

「どりやあああああっ!!」

「くっ……!!」

素早く振るわれた剣撃よりもさらに速く、干将と莫耶でアーチャーは受け止める。しかしモモタロスは攻撃の手を緩めず、何度でもアーチャーに斬りかかる。

「おらおらおらおらああああ!!」

「……チツ、コイツは分が悪いかつ……!!」

本来ならばセイバーであるモモタロスの攻撃はアーチャーには効きにくいだが、小さな

一撃を何度も、そして素早く繰り返されては限界があった。

そして、まだ予想外の事は起きた。

『ATTACK RIDE：BLAST!』

「なっ……!?!」

「そこだああああああつ!!」

背後から連続で銃弾が撃ち込まれ、さらに隙が出来たアーチャーの身体へとモモタロスオードの一撃が刻まれる。

「ば、バカな……!何故、貴様が……」

「いやあ、まさかあんなお宝を隠し持っていたとは予想外だったよ。だけど、緊急用のお宝を持つてるのは僕も同じでね」

生きていたデイエンドをよろめきながら見るアーチャーに、デイエンドは『ILLUSION』と書かれたカードを見せた。デイエンドは攻撃を受ける直前に『ILLUSION』の効果で自分の分身を生み、それを身代わりにして隠れていたのだ。

「ぐっ……ここまで、か……」

「ああそうだ、コイツで終わりだぜ」

魔力のチャージが完了したキャスターはアーチャーへと杖を向け、唱えた。

「とっておきをくれてやる——焼き尽くせ木々の巨人。『灼^{ウイ}き尽くす炎^{カー}の檻^マ』!!」

その瞬間、無数の細木の枝で構成され、その身に火炎を纏う巨人がキャスターの前から出現する。巨人はアーチャーを掴み上げ、胸に付いた檻の扉を開き、アーチャーをその中へ放り込んだ。そして、燃え盛る火炎は満身創痕のアーチャーをジワジワと消滅させていく。

「……フツ……あの日も、こんな風だったな……俺は、一人でこうして——」

アーチャーの脳裏に、生前の記憶がフラッシュバックし、自嘲気味な笑みと共にアーチャーは呟く。しかし、その呟きを最後まで言う事は叶わず、アーチャーの霊基は消滅した。

「……終わったな」

「ああ。それじゃ、早速士の援護に行きたい所だけど……」

「けど、何だ？」

「ここからは遠いからね。なるべく速く走るにしても間に合わないかもしれない。そこで一つ、速く着ける画期的な方法を考えたんだけど……」

「勿体ぶんなよ、早く教えろ盗っ人野郎！」

「OK、少し待ってくれ」

『KAMEN RIDE：G4！』

ディエンドは二枚カードを取り出し、まずは『仮面ライダーG4』を呼び出し、さらにもう一枚カードを装填する。

『ATTACK RIDE：GIGANT！』

そして、四つのミサイルが装填されたランチャー『ギガント』が出現し、G4はギガントの発射準備を整える。

「……お、おい。いい加減どうやって行くのか教えろってのー！」

「こうするのさ」

ディエンドは何処からか持ってきたロープをモモタロスの腰に巻き、ギガントに装填されたミサイルの一発にそれを結ぶ。

「おい！まさか、速く行く方法って……！」

「勿論、君をミサイルと一緒に飛ばすに決まってるじゃないか。ほら、走るより速いだ

ろう？！」

「ふざけんな!!んな事したら無事じゃ済まねーっての！」

「何を言うのさ、君だからこそ任せているんだよ。常人には耐えられなくても、君なら多分どうにかなるだろうし」

「んな無茶振り出来るわけねーだろ——」

「発射！」

「うっぎやああああああ!!!」

結果的にモモタロスの了承は得ず、強引にデイエンドはギガントを発射させ、モモタロスにはミサイルと共に猛スピードで飛んでいった。

聖剣 闇のセイバー

そして、時は少しだけ遡る。

道中の敵をその辺りに落ちていたパイプを変化させて作った『ドラゴンロッド』で蹴散らし、ディケイドD クウガは遂に大聖杯へと辿り着いた。

「……これが、大聖杯とやらか」

今も燃え盛っている炎よりも明るく、大聖杯は静かに周囲を照らしていた。ディケイドD クウガはクウガの FINAL ATTACK RIDEF A R のカードを取り出そうとライドブツカーに手を掛ける。

しかしその瞬間、ディケイドD クウガは何処か違和感を覚えた。

大聖杯は確かに目の前にある。だが、何かが違う。

次の瞬間、ロマニから通信が入った。

『土くん、上だっ!!』

「!」

言われた通りに上空へと目を向けると、こちらへ剣を振る降ろす黒い影をデイケイドは見た。

Dは素早く取り出すカードを変更し、装填する。

『FORM RIDE：KUGA TITAN!』

『仮面ライダークウガ タイタンフォーム』へと変身し、ドラゴンロッドを『タイタンソード』へと変化させると、互いの剣が交差する。

「ほう……今の一撃を受け止めるとは、やるな。悪魔よ」

「……お前がセイバーか」

「如何にも」

セイバーは不敵な笑みを浮かべて一旦後退し、再び黒く染まっている剣を構える。

デイケイド

D クウガもタイタンソードを構え、次の攻撃を警戒する。

「……お前の目的は何だ。何故この大聖杯を守る?」

「答えるつもりは無い。私はお前を倒す。そう言われたのでな」

「……誰にだ?」

「……鳴滝、と言ったか」

「またアイツか」

デイケイド

呆れるD クウガの脳裏に、ほくそ笑みを浮かべる眼鏡にブラウンのコートが印象的

な中年の男性の姿が浮かぶ。

「デイクイドをつけ狙い、幾度もデイクイドの旅の邪魔をしてくる謎の人物『鳴滝』。経歴や目的は一切不明であり、ただひたすらデイクイドの邪魔をする彼は、どうやらこの世界にも来ていたようだった。

「……奴は私にこう言った。『デイクイドはこの世界を破壊する悪魔。見つけ次第に倒し、消し去らなければいけない』とな」

「……全く、アイツは何が目的なんだよ」

「雑談は終わりだ、行くぞ」

セイバーは地面を強く蹴り、クウガ Dへ剣を振るう。デイクイド D クウガはタイタンソードで辛く

も受け止め、ギリギリと互いの刃が鏝迫り合う。

「チツ……セイバー 剣には剣だ！」

『KAMEN RIDE:BLADE!』

辛うじてライドブツカーから『仮面ライダーブレイド』のカードを取り出し、装填すると、カード型のエネルギーフィールド『オリハルコンエレメント』がベルトから放出され、セイバーを弾き飛ばす。デイクイド D クウガはその中を通り抜け、仮面ライダーブレイドの姿へと変身し、セイバーへと向かっていく。

「……面白い。貴様の手は見た。ならばこちらも少しだけ手の内を明かしてやろう」

「何——」

「ハッ！」

セイバーは剣を腰の横に携え、剣先を後ろに構える。次の瞬間、セイバーの姿はD
ブレイドの視界から消失し、Dブレイドの体に強い衝撃が走り、Dブレイドは大
きく後方へ吹き飛ばされた。

「ぐはっ……………」

「……………どうだ？中々効くだろう」

『土くん、大丈夫かい!?!』

セイバーは先程までDブレイドが立っていた位置に立ち、土の生命反応が揺らいだ
のを見たロマニが通信を入れる。Dブレイドはソードモードにしたライドブツカ
を杖にして立ち上がり、再びセイバーを見据え、構える。

「……………心配するな、ロマニ。あんたはカルデアを支えてろ」

「ほう、まだ立ち上がれるか。並みのサーヴァントや魔術師では二度と立てない一撃
ではあつたのだが」

「俺は仮面ライダーだ。嘗めるなよ……………」

「……………果たして、いつまでその強がりを持つかな?」

「っ……………」

セイバーはそう言いつつD^{デイクイド}ブレイドの右腕へ視線を移す。D^{デイクイド}ブレイドの右腕からは鋭い痛みが走る。先程のアーチャーとの戦いで負った怪我が余計に開き、スーツの内から血が垂れていたのだ。

『土くん、無理は止すんだ！下手をしたら右腕が使い物にならなくなってしまおう！』

「……平気だ。腕一本無くなってもまだ戦える」

「……その心意気は認めてやろう、『デイクイド』。お前は中々の戦士だ。その闘志を讃え、我が聖剣の一撃で葬ってやる」

セイバーは剣を腰に構え、魔力を集中させる。セイバーの体内から産み出される膨大な魔力は剣から溢れ、漆黒の魔力はより多く、強力に放出されていく。

「『卑王鉄槌』、極光は反転する——」

詠唱を口にするセイバー、ライドブツカーを構えるD^{デイクイド}ブレイド、固唾を飲んで見るロマニ。

もしこのまま宝具を放たれば、土は間違いないで負ける。土が負ければ、マスター候補は居なくなり、カルデアは絶望に叩き落とされるだろう。

しかし、ここで時間は『ある作戦』が行われた後に当てはまる。

「光を呑め……! 『約束された——』」
エクスカリ——

「ぎゃあああああああああ!!!」

悲鳴が周囲に響きながら、ディケイド D ブレイドとセイバーの間に見覚えのある赤いイメージが落ちる。そして悲鳴と共に飛んできた何か飛来するような音が、セイバーの前に落ち、爆煙が舞い上がる。

「……モモタロス!」

「へ、へへ……俺、参上……」

『ナイスタイムングだ、えーつと……モモタロスくん!』

そう、今の時間は前回のモモタロスとギガントのミサイルに括り付けて発射してディケイドの元へ送るという作戦の行われた時間だったのだ。

結果的にモモタロスは危機に瀕していたディケイドを救い、セイバーの邪魔をする事に成功した。立案者のディエンドも今頃ほくそ笑んでいるだろう。

「おのれ、空からの奇襲とは卑怯な……」

「俺だって飛びたくて飛んできた訳じゃねえっ!」

溜まりに溜まった魔力を放出する事無く、文句のように言葉を口にする爆煙から飛び出すセイバーと、それにツツコミを入れるモモタロス。しかし本当に飛びたくて飛んできた訳ではないのだ。

「どうでもよい、今一度消えるがいい……」

「……モモタロス、俺に入れ！」

「おうっ！」

セイバーは再び魔力を溜め始める。モモタロスはD^{デイクライド}ブレイドに提案されるままに憑依した。

「俺、参上！」

右手の親指で自分を指差し、体を少し捻り開いた両手の内左手を前に出し、右手を後ろで横に構えるお決まりの決めポーズと決め台詞を言い、D^{デイクライド}ブレイド（INモモタロス）はライドブツカーを手取る。

《いいなモモタロス、俺の指示には従えよ！》

「しゃーなーな、わーったよ！っつーか右手が痛^{いて}え！」

剣・英霊セイバーズ

「行くぜ行くぜ行くぜえええ!!」

セイバーが発射する魔力の弾丸をライドブツカーで弾き、切り裂きながらD^{デイクライド} ブレイド（INモモタロス）は突き進む。

無駄と判断したのかセイバーも剣を構え、ジェット機のように足から魔力を放出して加速し、D^{デイクライド} ブレイドに肉薄した。

「ぬおらああっ……!!」

「くっ……!!」

金属が衝突する音が響き渡り、互いの剣が鏝迫り合う。

根性で押し切ろうとするD^{デイクライド} ブレイドと、魔力によるブーストで押し返そうとするセイバー。

D^{デイクライド} ブレイドが押し切ろうとすれば魔力の放出量を増やし、D^{デイクライド} ブレイドはそれより強く押し切ろうとする。そしてまたセイバーは魔力の放出量を増やす。

時間にして僅か十数秒の出来事だが、いちちごっこのように続く前に、両者はバツクステップで距離を取る。僅かに互いを睨み合ってから、先にD^{デイクライド} ブレイドが仕掛けた。

「喰らえこんにやろおおおつ!!」

縦に振り下ろされた最初の一撃を、セイバーは剣を横向きに受け止める。しかしそれでもDブレイドは止まらず、乱打するように素早く斬撃を叩き込み、セイバーのガードを崩そうとする。

しかし、セイバーも攻撃を的確に防御し、掠り傷すら負うことは無い。

「……無駄だ。貴様の攻撃は単調過ぎる。言つてしまえば剣術ではなく、単なる子供の喧嘩と同義だ」

「んだとおくくつ……?!」

セイバーの告げた言葉に、土に取り憑くモモタロスの切れやすい堪忍袋の尾がぶちりと盛大な音を立て、切れた。

「上等だこの野郎! だったらテメーの言う子供の喧嘩がどんだけ強えか思い知りやがれコラアアツ!!」

怒りで我を忘れたモモタロスは、ライドブツカーを縦横無尽に振り回すように何度もセイバーの剣へと叩き付ける。そんな彼に呆れながら、セイバーは先程と同じく正確に攻撃を弾いていく。

「……この程度か、つまらん。もう少し楽しめると思ったのだが——」

言いかけたセイバーの語尾は、頬を掠めた剣先が空を突くと共に途切れた。

「なツ……!!?」

「チツ、外した!」

セイバーは驚愕の声を漏らすと同時に、デイケイドD ブレイドは惜しい所で避けられた事の不満に舌打ちする。

しかし、セイバーに僅かな隙が出来たのを、体内の士は見逃さなかった。

《今だモモタロス! 『SLASH』のカードを使い!》

「すらっしゅ? コイツか!」

士の指示を受けたモモタロスはライドブツカーを開き、クラインの壺から『SLASH』のカードを引き出し、デイケイドライダーに装填する。

『ATTACK RIDE: SLASH!』

カメンライドが解除され、剣の姿からデイケイドの姿に戻ると、デイケイドはディメンションエネルギーを一点に集中させ、刀身を分身させながらセイバーの鎧を突いた。

「ぐあああああつ!!」

胴体の鎧が粉々に砕け、セイバーは遙か後方へ吹き飛び、壁に叩き付けられた。

「どうでえ、見たか！戦いつてのは技術とかじゃなくてその場のノリなんだよー！」
デイクイドはハンツと鼻を鳴らして胸を張る。しかし、士は何か引つ掛かる違和感を覚えていた。

《……おいモモタロス、お前いつの間にそこまで速くなった？》

「ああ？俺は別に何にも変わってねーぞ？お前がノロいだけじゃねーのか？」

《……お前に聞いたのが間違いだった》

「んだとコラア!!」

他人から見れば一人で見えない何かと会話し、喧嘩をしている風に見えるが、セイバーはその光景が可笑しいのか、それとも別の意図があるのか、薄ら笑いを浮かべながら立ち上がる。

「お前の実力……見くびっていたようだ。やるな、小鬼」

「鬼じゃねえっ!」

モモタロスの怒号も無視し、セイバーは腰を落とし、剣を構える。

「その力に敬意を表し、私の最大の一撃をくれてやる」

そう告げると、セイバーの剣から漆黒の魔力が溢れ、その場で台風が作られたかのよ

うに風が巻き起こり、やがては一つに収束していく。

《モモタロス、アレを喰らったら不味い！離れろ！》

士とモモタロスは本能的に危険を察知し、少しでも距離を取る為に身体を走らせる。しかし、セイバーの魔力は既に満ちていた。

「逃がさん」

「エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣!!」

激流の如く放たれた、闇の魔力がデイケイドを襲った。

後輩マシユ、参上!

死の奔流が、背後より迫る。このまま走つても間違ひなく逃げられないと、モモタロスには悟った。

ただし、自分の行動次第で士だけなら逃がす事も可能という事も、モモタロスは悟っていた。

僅かな刹那、モモタロスは口を開く。

「……おい士、今から俺の言うことよく聞けよ」

《なんだ!? そんな事より今は——》

「いいから聞きやがれ。いいか? このままじゃ俺達二人ともやられてお仕舞いだ。だけれどよ、お前だけなら逃がせるかもしれないねえ」

《……お前、何をする気だ》

「俺が盾になってやるよ。その際に行きやがれ」

《待てつ、モモタロス——》

士の制止も聞かず、モモタロスはディケイドの肉体から飛び出し、大の字に身体を拡げ、その場に仁王立ちする。

地を砕き、モモタロスに迫るセイバーの宝具。デイケイドはライドブツカーを開き、現状を打破する為の切り札を探す。しかし、そんなものは無い。どう足掻いても、今のデイケイドにはモモタロスを救い、自分も助かる為のカードは揃っていないかった。

（駄目なのか……今の俺には、力が足りないのか……）

士の心に不満や怒り等が混ざった感情が渦巻く。悔しながらも、今はモモタロスが救おうとしてくれるこの命を優先しなければならぬ事は、士にも分かっている。

無力感を噛み締めながら、デイケイドはモモタロスに背を向け、走り出そうとした。

しかしその時、黒い閃光の如き『何か』が、デイケイドを飛び越え、モモタロスの前に着地した。

「――ロ仮想宝具ド カ疑似展開ル / デ人理アの礎ス!!」

次の瞬間、前方に巨大な魔力障壁が出現する。それはセイバーの宝具を受け止め、膨大な魔力を別方向に受け流し、デイケイド達を護った。

「お前は……」

障壁が消え、宝具同士がぶつかり合う衝撃で産まれた土煙が薄くなると、デイケイドは障壁を発生させた盾を携える者の顔を見つめる。そんな事が出来る人物は、一人だけしかない。

「先輩、モモタロスさん、ご無事ですか？」

「マシユマロオ！」

「マシユ……」

デイケイドの思った通り、二人を護った人物は、つい先程宝具を使いこなせるようになった少女、マシユ・キリエライトだった。

「ほう……私の宝具を防ぐとはな」

「あれが……セイバー、ですな」

土煙の中からセイバーが姿を現す。その表情には感心と、僅かな焦燥が見え隠れしているようにも見えた。

「……そうか。その盾を以て私の宝具を防いだか。ならば納得だな……最後の最後で、手が緩んでしまったか……」

マシユの盾を凝視し、何かを理解したセイバーは何処か安心したような笑みを浮かべ、地面に突き刺した剣に寄りかかりながら膝をついた。既にセイバーの魔力は、限界を迎えていたのだ。

「フツ……私も最早、限界か……結局、どう運命が変わろうと私一人では同じ末路を迎えるという事か……やれ」

剣を杖にしながら、身体をふらつかせつつもセイバーは立ち上がる。その様子を、マシユは何処か寂しそうな表情を浮かべ、沈黙していた。

デイケイドはセイバーの意思を汲み取ったのか、『ケータッチ』と呼ばれるスマートフォンに酷似した端末を取り出し、画面に刻まれた九人のライダーの紋章を順番に押ししていく。

『KUGA! AGITO! RYUKI! FAIZ! BLADE! HIBIKI! K
ABUTO! DEN-O! KIVA!』

『FINAL KAMEN RIDE: DECADE!』

全て押し終えた後、デイケイドの紋章を押し、デイケイドライバーのバックルを取り外し、ベルトの右サイドに移動させ、代わりにケータッチをバックル部に装着させると、デイケイドの身体は変化していく。

緑の複眼はピンクに変わり、額にデイケイドのカードが装着され、さらに右肩から左肩にかけて一直線に九人のライダーカードが現れ、デイケイドは『コンプリートフォーム』へとパワーアップした。

「……やるぞ、マシユ」

「……了解、しました!」

『FINAL ATTACK RIDE: DE DE DE DECADÉ!』

FINAL ATTACK RIDE

F A

Rのカードを移動させたバックルへ装填し、出現したカード型のエネルギーと共にディケイドは飛び上がる。それと同時に、マシユは盾を地面に固定し、その盾を踏み台にしてディケイドと同じ位置まで飛び上がった。

「ハアアアアアア——ッ!!」

「シールダー、キイイック!!」

ディケイドはエネルギーをくぐり抜けながら、マシユは足に炎を纏わせ、同時に必殺のキックをセイバーへと叩き込む。セイバーは吹き飛びはしなかったものの、後ろへよろめきながら告げる。

「気を付けるといい……『グランドオーダー』は…聖杯を巡る戦いはまだ、始まったばかりだ…破壊者よ…お前が、何処まで力を尽くせるか、見物だな……」

そう告げると、セイバーの身体からは魔力の光が漏れ、溢れた魔力はその場で爆発を

起こし、セイバーの姿は消えた。